スポーツ人類學研究
第14号：33 - 38，2012

研究資料

ブータン子どもの生活とあそびの変容
―タシヤンツェを中心に―

黒岩　千恵子

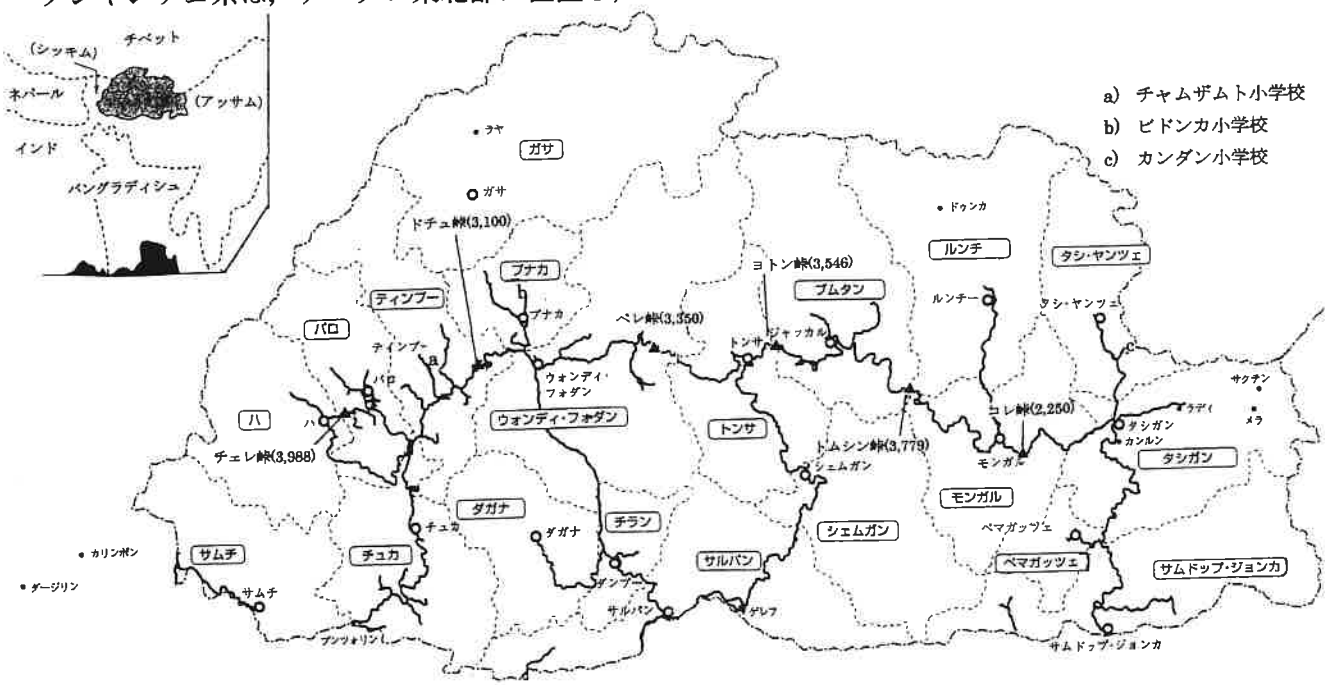
はじめに

スポーツ人類学研究第9号（2007）本人論文を受け，2008年7月28日から8月17日までブータンに滞在し，追跡調査を行なった。特に，本人ことわり箇所[1]の東部地方の情報収集のために，民家でホームステイさせてもらい，この間，学校関係者からの協力をいただいた。今回は，首都・西部地区を含めた3つの小学校で直接アンケート（本調査は一部）も実施し，前調査からの過程を知る上で，重要なてがかりとなると思われる。本小論は，その報告である。

1．調査地の概要

タシヤンツェ県は，ブータン東北部に位置し，首都から車を利用して1泊2日から2泊3日を要する。北はチベット，東はインドアッサムに接する内陸地にある。国内の秘境とも称され[2]，パロ県の空港からアクセスのしやすい県と比較して，海外からの観光客はほとんどない。歴史的に見れば，国道が舗装される以前には，中央部ブムタンから北方に現トレッキングルートがあり，インド・東チベットへ続く道の宿町にされてきた。現在，タシヤンツェの町中より国境外に抜ける車道は通っておらず，細い山道が奥地へと続いている。

生業は，漆器製造が中心で，2世代ないし3世代で農家を営んでいる家庭，また，この二つの兼業をとる世帯がほとんどである。この他の職業は，公務員，教員，商店経営，ホテル経営などである。



2. 子どものあそび

2-1. タシヤンツェ全域でのあそびと過ごし方

（今回の調査で得られた事例に限る）

アーチェリー，クルー，デゴ[3)]，歌，ダンス，けんけんぱ，石あそび，マーブルあそび，ビー玉あそび，おはじき，かけっこ，なわとび，おしゃべり，川あそび，動物とのあそび，機織り，ラジコン，ゲーム（任天堂）。

2-2-1. 小学校でのあそびと過ごし方

表1　休み時間と放課後のあそび

男児	女児
サッカー，バレーボール，デゴ，石あそび	バレーボール，縄跳び，石あそび
マーブルあそび，コミック（英語）読み	けんけんぱ，おいかけっこ，指あそび
コマ送りマンガ描き，縄跳び	おしゃべり
軽エアロビ	軽エアロビ

学校の体育教員にスポーツ用品を借りて，球技をする光景が見られるようになった。特に，成人男性とともにサッカー熱は高い。

2-2-2. 小学校の体育の授業

タシヤンツェ町の中心にある小学校について：日本人1名と歴史と兼任する現地男性教員（27歳）が，体育指導員として学内に配置されている。

（5年生のある日の体育，器械体操の様子）

体育館はないが，板張りの礼拝堂を利用して，日本人指導員が個人で購入した薄い布団を数枚敷き活動する。準備運動，ストレッチなどを軽く行ない，その後，開脚前転を教員が実際に行なう。各自児童でまず練習し，うまくできるものに代表でやってもらう。次に，男児が練習し，次に女児が練習し，お互いに協力し合ってアドバイスなどをさせる。最後に布団を縦向きに長くつなげて，前転と開脚前転を交互に行なう。

1995年時に行なっていた初期指導員の方法と大きく変わった様子はないが，スポーツ用品や教具，道具などは確実に増えており，学校でも体育予算枠組みをとっているようだ。また，パロ教員養成学校では，体育に関連する講義が設けられるなど，教育界全体での理解が得られて浸透してきている。

放課後は，運動場で，軽エアロビを行なっており，男女問わず教員も参加している。近年，農林業従事者など重労働者以外での成人でメタボになる青年が多く見うけられるが，日常生活に運動を取り入れようとする機運は，全国的にも高まってきているようだ。

3. アンケート調査

アンケートには，国内3校からの協力を得た。3校の概要は次のとおりである。

① 首都テォンプー県のチャムザムト小学校6年生50名：ティンプーの町中の東側に位置する。両親が，公務員，観光業，商店，兼業農家などである。回答者は，ブータン人39名，ネパール系10名，インド人1名が含まれる。

② 首都北側に位置するブータン西部地区プナカ県のビドンカ小学校6年生50名：（筆者は，2000年，2001年に，調査に2度入ったことのある校区）農業中心で生活をしている。地元から出たことのないブータン人36名およびネパール系教師を親にもつ児童3名である。

③ ブータン東北地区のタシヤンツェ県のカンダン小学校6年生24名：タシヤンツェ町から10ｋｍほど南方に位置する。漆器製造を中心に織物，兼業農家などである。全員が地元出身であり，ほとんどの児童が郷里から離れたことがない。

3-1. 「放課後や休日の過ごし方について」

「放課後や休日はどのように過ごしますか」という質問のあと，表中，解答内容1～7を提示しチェックしてもらう。解答6と7にチェックを入れた者は，Q 4-2で，どんなテレビ番組を見るか，あるいはどんなビデオを見るかを3つまで記入してもらった（表2）。

表2　放課後や休日の過ごし方

(Q4－1)	ティンプー (50)	プナカ (50)	タシヤンチェ (24)
1 手伝い	33	43	15
2 勉強・宿題	40	41	16
3 昼寝	9	11	1
4 屋内で友人とあそぶ	23	17	9
5 屋外で友人とあそぶ	33	30	11
6 テレビを見る	42	16	11
7 貸しビデオを見る	20	15	9

3校においては，屋内よりも屋外であそぶ機会が多いことが分かる。

プナカでは，依然として手伝いをする児童が多い（84%）。家の手伝いを当然で良しとされてきたタシヤンツェ地域ではあったが，首都(66%)と比較しても62%とやや低めに感じられ，変化がおきているように思われる。

一方，3校ともに勉強・宿題とチェックした児童が多かったのであるが，これは，将来的にいい仕事に就きたいという本人の意志の表れであることが個別質問で分かっている。タシヤンチェ県カンダン小学校区の親にも聞き取りをしたところ，良い成績で公務員になってほしいという希望が多いことが分かったことから，前述の手伝いの時間の減少は，その時間を学習にあてられるように親が配慮するようになった結果ではないかと推察される。

ティンプーでは，他2校と較べて，テレビや貸しビデオを見て過ごす児童が多いことが分かる。プナカやタシヤンツェにおいては，以前調査した時と比較して，電気の普及などの影響により，次第にテレビの個体数は増えている（3-3参照）。ただし，首都では個人宅でテレビを見ているのに対して，他2校区ではテレビを置いている近所の家に集まって数人で見る傾向にあるようだ。

（Q 4-2-1）「どんなテレビ番組を見るか」に対しての解答は次のとおりである。

○ティンプー：1位，ＢＢＳニュース（35），2位，ハリウッド映画（16），3位，Cartoonトムとジェリー（14），4位，ＨＢＯ Star Movies，5位，Star Plus（6），6位，ドキュメンタリー，インド映画（4），7位，Discovery(3)であり，この後に，英語での映画，Nation Geography，アニマルプラネット，Zee plus，ノーリンケーブル（地元番組）と続く。

○プナカ：1位，ハリウッド映画（10），2位，ニュース（9），3位，音楽（2）であり，この後に，cartoon，スポーツ番組，科学，Histonian pictureと続く。

○タシヤンツェ：1位，ニュース（18），2位，ハリウッド映画（6），3位，アニマルプラネット，Discovery&living（3）であり，この後に，ゾン語ニュース，ブータン映画，英語の映画，インドの番組，ノーリンケーブルと続く。

全体的に英語を媒体とした番組がほとんどであり，映画を中心にして，話の展開が理解しやすいものや，自然・社会科学方面に興味が置かれているようである。地元の番組（ゾン語）に関しては，あまり人気がないようであるが，映画施設自体に目を向けてみると，首都近郊での増設にともない観客動員数も増えている。また，夕方のゾン語ニュースに関しては，児童が親や祖父母などとともに見る世帯は非常に多い。

（Q 4-2-2）「どんなビデオを見るか」に対しての解答は次のとおりである。

○ティンプー：1位，インド映画（18），2位，恋愛もの（15），3位，コメディー（13），4位，韓国映画（3）でありこの後に，トムとジェリー，サッカー，ネパールソング，歴史もの，ブータン映画，恐怖ものと続く。

○プナカ：1位，インド映画，恋愛もの（7），2位，スポーツ（3），コメディー（2）である。

○タシヤンツェ：1位，インド映画（14），2位，恋愛もの（12），3位，コメディー（5）でありこの後に，スポーツ，ファッション，ネパール映画と続く。

最近，首都圏を中心として，韓国人の芸能人に人気が出てきたようである。これは，親類に海外留学経験者や研修者がいて，その影響を受けるケースが多い。映画は，万人に内容が理解されやすいインド映画が1位にあがっているが，実際の恋愛にはどんなことを望むかについて質問したところ，アクティブで展開が早いインド映画のようなものとは対照的に，純愛・切なさを感じられるものが理想的であり，それが成人を含めて韓国映画の人気に拍車をかけている理由の一つとなっているようである。

3-2.　「よくするあそびやスポーツについて」

日頃よくするあそびやスポーツについて，3つまで記入してもらった（表3）。

サッカー・バスケット・バレー・バドミントン・クリケットなどのスポーツが顕著に増えてきていることがうかがえる。

首都では，パソコン・ゲーム機器のあそびが増えつつあるようだ。他の2地区よりも物が手に入りやすいという環境下にある他，海外に出る親類に遊具などを頼み，持ち帰ってもらうという児童が3，4名存在した。なお，タシヤンツェの児童も後者に入る。

アーチェリーやクルーはブータン全土で男子に見られたあそびであるが，首都では0%と断然減少している一方で，ビドンカとカンダンでは依然行なわれている。カンダンでは女児も行なっている。ところで，児童におけるアーチェリーは，自家製の木製弓と矢を使用している[4]。

表3　よくするあそびやスポーツ

(Q4-2)	ティンプー（50名）		プナカ（50名）		タシヤンチェ（24名）	
	男（24）	女（26）	男（27）	女（33）	男（14）	女（10）
サッカー	21	10	13	25	12	6
バスケットボール	6	6	0	0	1	0
バレーボール	8	13	8	21	7	1
バドミントン	1	3	1	5	0	2
スローボール	0	1	0	0	0	0
クリケット	7	1	0	0	0	0
アーチェリー	0	0	2	0	4	1
クルー	0	0	1	0	3	2
ダンス	0	0	0	1	2	0
けんけんぱ	1	17	0	11	0	0
ゴム跳び	0	11	0	2	0	3
縄跳び	0	2	0	0	0	0
自転車	1	0	0	0	0	0
パソコン	2	0	0	0	0	0
ゲーム機器	2	0	0	0	1	0

3-3. 子どもの所有物について

表中回答内容11種類を提示し，その他に所持している物があれば書き出してもらった。親の所有物についても同様に解答（表4）。

以前，ノート書きの際には，ほとんどの児童がペンや万年筆を使用しており，特に試験中の誤字脱字などの訂正で苦心している児童も多かったが，最近では，鉛筆と併用する児童が増えつつある。それにともない消しゴムの需要も高まってきている。

鞄については，以前はプナカ・タシヤンツェでは見られず，児童のほとんどは民族衣装着衣時にできる胸部打ち合わせの懐にしまっていたが，現在はどの校区においても，使用する率が高くなっている。

テレビは，2001年時（この地域の電気普及以前）プナカ県のビドンカで0%だったのが，7年のうちで24%の家庭に置かれたことが分かる。

携帯電話は，ブータン全土で急速に普及しつつある（チャムザムト校区96%）が，首都では，親の所有と別に子どもにも個人的に持たせるようになってきている。

3-2のタシヤンツェのカンダンにおいても女児がアーチェリーを行なうが，以前見られなかったプナカのビドンカでも道具を所持する女児が増えている。これは，国際大会に向けて強化選手の中に女性も存在していることも一要因になっていると言えよう。

4. ブータン全域とタシヤンツェ県の子どもの生活とあそびの変容

以上の調査結果から，いくつかのことが分かった。

タシヤンツェ県において，1996年時は，首都に比べて，あそびの種類は少なく，男児のアーチェリー，クルー，デゴなどのあそびを除けば，道具を使う光景を見ることがあまりなかった。現在は，あそびの内容も豊富になってきており，特にはあそび道具が増え，また自然にある石あそびがマーブルに変わり，植物のつるを利用しての縄跳びも，インド製のビニール縄にとって変わるなど，道具の移行が見受けられる。また，インド経由以外の外国のあそびものが入ってきている。

1996年時は，児童の一部に学校に登校しないで，日中家の手伝いをしたり，学校終了後，即帰

表4　子どもの所有物

(Q2-1と2)	ティンプー（50）			プナカ（50）			タシヤンチェ（24）		
	個人		親	個人		親	個人		親
	男（24）	女（26）		男（27）	女（33）		男（14）	女（10）	
鉛筆	16	18		15	30		5	7	
通学用鞄	19	22		15	32		9	9	
時計	11	12	36	6	14	39	7	4	13
ラジオ	3	8	27	3	4	44	1	0	19
テープレコーダー	1	6	14	1	3	26	0	0	14
CDラジカセ	5	2	13	0	2	12	0	0	2
テレビ	0	0	35	0	0	12	0	0	7
パソコン	3	4	6	0	0	1	0	0	2
携帯電話	9	6	48	0	0	39	1	0	17
アーチェリー道具	2	0		10	5		8	0	
縄跳び	0	9		5	9		2	4	

宅し手伝いをしたりする児童が多かった。しかし2008年では，僻地における学校や橋の建設により，児童の登校時間も短縮され，放課後も学校に残るなどして遅くまであそぶ児童が増えている。また一方で，平日においては，学習にも多くの時間を割くようになってきた児童が増えている。

アーチェリーは，国技であり伝統競技となっているが，首都の児童においては，あそぶ人口が減少傾向にあるようだ[5)]。これは，建築ラッシュによる土地の減少だけでなく，学習時間の増加によるあそび時間の減少，他のあそびへの移行などの理由が考えられる。これに対し，地方では，依然としてとても人気のあるあそびであり，デゴやクルーとともに，最近では，女児もあそぶようになってきているようだ。一方，近代的学校教育の体育の普及にともない，あるいは近年ではテレビ観戦を介してなど，競技スポーツ実施の拡大が進んでいる。

また，娯楽機器，電気機器などが，子どもの世界にも新しく入ってきている。そのスピードは，ゆるやかではあるが，流通，人的交流など，特にブータンでは，海外留学生や研修生などが持ち込むケースが多く，確実に国内に増加しつつある実態がある。

ところで，プナカ県ビドンカ校区での電気の普及にともない，テレビの普及率は，24%の家庭が購入した事実が明らかとなったが，短期に急速に伸びることはなかったようだ。これは，経済的理由のほかに，特に年輩者向けのゾン語の番組が少ないという背景があるではないかと地元の教育関係者は語る。

おわりに

1996年，2001年当時の様子と比較する中で，ブータンにおける子どもの生活やあそびは，ゆるやかではあるが，地方においても確実に変化していることが分かる。特に首都ティンプーでは，その変化が顕著である。

民主化まもないブータンではあるが，以前よりＧＮＨ（国民総幸福）というスローガンをかかげ，様々な分野にわたり政策を打ち立て実践を繰り返してきた。近年では，その動向に対し，世界から注目を集めている。民衆の精神的幸福度に大きく支えられながらも，今後持続可能な国家のために，伝統と近代化のバランスをどのように捉え，次の時代にどのように繋げていくのか。その中でのブータンの民衆生活は，どのように変化していくのか，引き続き今後の課題としたい。

【註】

1) 2007: p.54.
2) 機内フライト雑誌に記載されている。
3) アーチェリー，クルー，デゴのあそび方は，(2007) を参照されたい。
4) 成人男性になるとそのほとんどは，自家製の木の弓具（2007:p.56）から，洋弓具（アメリカ・韓国製）に変わってしまった。ただし，弓の部分だけであり，照準器などは付いていない。
5) 首都での成人男性の競技人口は多く，競技大会がよく開かれている。

【参考文献】

Druk Air, 2008 The in-flight magazine of Tashi Delec 25 Anniversary 1983-2008.

日本スポーツ人類学会，2007,「スポーツ人類学研究」，第9号，2007.

スポーツ人類學研究
第14号：39 - 50. 2012

研究資料

メキシコ先住民伝統スポーツ調査報告

小木曽　航平[*1]　國實　真美[*2]　庄形　篤[*3]
ソコロ・アルバレス[*4]　園家　晋一[*5]
中嶋　哲也[*6]　寒川　恒夫[*7]

1. はじめに

2010年10月20日から10月30日にかけて早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ人類学研究室はメキシコ合衆国（以下，メキシコ）の「先住民伝統スポーツ（Juegos y Deportes Autóctonos y Tradicionales）」[i]に関する現地調査を実施した。本稿はその報告である。本稿では以下の三つの事例について報告する。1）メキシコ・シティにおける先住民伝統スポーツ施設建設計画について，2）メキシコの学校体育における先住民伝統スポーツの導入について，そして3）タバスコ州の州都・ビジャエルモサで開催された先住民伝統スポーツ大会についてである。

メキシコ政府は2001年より自らを多文化国家と規定し，これによって先住民が自らの文化を国内において自由に行使する権利を保障した[ii]。歴史的に多数の民族が混在してきたメキシコにおいて，各々のエスニック・アイデンティティをいかに“メキシコ国民”というナショナル・アイデンティティに統合するかが国家政策の中で重要な位置を占めてきた[iii]。先住民の伝統文化はそうした背景の下，国家によって，政治的，経済的，文化的に様々な文脈で活用されてきたといえるだろう。先住民を近代国家や近代社会にどう取込んで行くかということがメキシコの誕生以来の課題であり続けた[iv]。先住民を対象にした政策や運動，またその背景となる思想は「インディヘニスモ」とも呼ばれている。そして現在，政府系組織や市民団体などによって，民族の歴史とアイデンティティを表象する先住民伝統スポーツが多民族国家メキシコを形成するための文化装置として注目されている。本稿ではそのような観点のもと，メキシコ先住民伝統スポーツの現在を調査した。

2. 調査地の概要

1810年，北米大陸の南に位置するヌエバ・エスパーニャが宗主国であったスペインから独立することでメキシコは誕生した。現在，この国の正式名はメキシコ合衆国（Estados Unidos Mexixanos）であり，その名が示すとおり，31の州と1つの連邦区から構成されている。日本の面積の約5倍に当たる196万4000平方キロメートルの国土に，1億670万人が暮らしており，その内の約60%はメスティソ（先住民とスペイン系白人の混血），約25%が先住民，約15%がスペイン系白人であるとされている。メキシコの公用語はスペイン語であるが，この他にナウアトル語，

[*1] 早稲田大学大学院博士後期課程　[*2] 早稲田大学大学院博士後期課程　[*3] 早稲田大学大学院修士課程
[*4] 筑波大学　[*5] 伊丹市立高校教諭　[*6] 早稲田大学　[*7] 早稲田大学

ユカタン・マヤ語，ミシュテコ語，サポテコ語など50以上の先住民言語が話されている。

本調査が行われた2010年はメキシコがスペインから独立して200年，そして1910年のメキシコ革命から100年を経た記念の年であった。ディエゴ・リベラの壁画『メキシコの歴史』で知られる国立宮殿では，この記念すべき年を祝福するための催しが行われていた。宮殿の中の各部屋にはメキシコという国家の成り立ちを知るための様々な展示品が用意されていた。最初に通されたのは，メソアメリカに広がっていた古代文明の時代から現代のメキシコに至るまでの壮大な歴史物語が映像化された作品が見られる部屋であった。それに続き，各年代の国旗が展示された部屋を抜け，絵画や美術品をクロノジカルに配した部屋へと至る。メキシコの歴史が独立と革命からなる闘争の歴史であることが窺われた。独立と革命の歴史は多くの文化と民族の混淆の歴史でもある。

メキシコはメキシコ革命以後，メキシコ国民文化の創出のために先住民伝統文化を活用してきた。その良い例を舞踊に見ることができる[v]。アマリア・エルナンデスが1952年に創設したバレエ・フォルクロリコ・デ・メヒコ（the Ballet Folklorico de Mexico）による「メキシコ民俗舞踊[vi]」は「メキシコという国家成立の歴史絵巻（吉田2005)」と評される。ここからはメキシコがナショナル・アイデンティティの創出に先住民伝統文化を積極的に取り入れ，活用している様子がみて取れる。我々はこの舞踊をメキシコ人類学博物館内のホールで観ることができた。観客の多くは観光客ではなくメキシコ人であった。構成された演目の多くがメキシコ人にとって馴染みのものばかりだったのであろうか，初めて観る我々にはいささか単調に映る演目の繰り返しにも会場は存外の盛り上がりであった。

今回の調査では体育大学，小学校，そして先住民伝統スポーツ大会を訪れた。その何処においても我々はメキシコの民俗舞踊を目にすることとなった。ハリスコ州，タバスコ州，オアハカ州など，それぞれの州のそれぞれの民族の踊りは今やメキシコの踊り，メキシコの伝統舞踊として踊られているのである。そして，舞踊に加えて今では先住民伝統スポーツがメキシコの国民統合を成す文化装置としての機能を果たし始めている。

3. メキシコの先住民伝統スポーツ

ここではメキシコの先住民伝統スポーツ，とりわけボール・ゲームについて触れておく。もちろんボール・ゲーム以外にも多くの先住民伝統スポーツが現在に伝わっているが，それらについては6の〈先住民伝統スポーツ大会〉の箇所に豊富な例があるのでそちらに譲りたい。

メキシコの代表的な先住民伝統スポーツはボール・ゲームである。ボール・ゲームについて遺物から確認できる最古の年代は紀元前に求められ，これまでにオルメカ文明の遺跡の一部からゴムでできたボールらしきものが発見されている。また，ボール・ゲームを行っていたと考えられる競技場はメキシコの各地で1500箇所ほど見つかっている。ボールはゴムで作った。競技者がこれを腰で打ち返し合った。スティックを使用したボール・ゲームも確認されている。ボール・ゲームは現代でも人気の先住民伝統スポーツの一つである。なかでも，スティックを操るペロタ・プレペチャは全国大会が開催される程である。

メキシコ北部の高地に住むタラウマラが行うボール・ゲームはとりわけ過酷なゲームとして知られている。参加者は二チームに分かれて，野球のボールほどの木製のボールを足で蹴り，ボールの落ちた箇所まで走り，またそのボールを蹴る。こうしてうまく蹴り，そして走り続け，決まったゴールに先に着いたチームが勝ちとなる。勝負はときには2日がかりになる。

ミシュテコ人のボール・ゲームで使われるグラブはとても手の込んだものとして有名である。厚手の皮でできたグローブの手のひらの側の表面には鋲が打ち込んであり，そこにボールが当たるようにする。グローブの重量は4～6キロにもなる重いものである。ミシュテコのボール・ゲームはプエブラ州，ベラクルス州，メキシコ連邦州などで行われている。このミシュテコのボール・ゲームについては，4の〈先住民伝統スポーツ施設建設計画〉でも触れられる。

ひとくちにボール・ゲームといっても，民族ごとに大きく異なっており，とても一つにまとめることができない。言うまでもなく，スペイン人の入植以前と以後でもその様相は変化しており，メキシコのボール・ゲームは通時的にも共時的にも複雑な文化ネットワークの上で今日まで発展してきた。むしろこうした多様性こそメキシコのボール・ゲームの最大の特徴といえるだろう。

（小木曽）

4. 先住民伝統スポーツ施設建設計画

本稿ではメキシコ市で現在実施中の先住民伝統スポーツ施設建設について報告する。2010年10月21日メキシコ市にてアナ・クラウディア氏から聞き取りを行った。アナは普段デザイナーとして活動しているが，文化振興の活動にも従事しており，1995年からメキシコ市に登録されたゲームを振興していた[vii]。

アナは日常生活における「遊戯」に関心を持っており，これまで実践人口の減少傾向にあった“UARUKUA（ワルクァ＝伝統的なボール・ゲーム）”のリヴァイバルを企ててきた。ワルクァは，もともと男性ばかりで行われた荒々しい遊戯であり，労働後の余暇に中年男性が楽しむ伝統的な遊戯であった。ルールは1つのボールをスタート地点からゴール地点まで運べば勝ちというもので，自チームと相手チームはそれぞれ反対方向に向かってボールを運んでいく。実際は誰かの家の周りを使って勝負し，1周して元のスタート地点までボールを運べば勝ちとなる。ただし，フォーク・ルールが多く存在していたため，ある時期にルールが統一され，スポーツ化が果たされたという。アナはワルクァ始まって以来初の女性プレイヤーであるが，このように先住民の伝統スポーツを対象とした文化振興に携わってきた。

さて，アナが述べるところ，近年メキシコ市当局は先住民伝統スポーツに関心を持ち始めているという。発端はミシュテコ族と政府の間で起きた論争にある。ミシュテコ族はメキシコ国内及びアメリカ合衆国のカリフォルニア州などにも点在している民族だが，ミシュテコ・ボールという先住民伝統スポーツを行っていた。彼らは毎週決まった日時に60人くらい集まり，メキシコ市内にある廃屋化した旧警察施設を利用してミシュテコ・ボールを楽しんでいた。

ところが，政府はミシュテコ・ボールが行われていた旧警察施設をミシュテコ族から取り上げてしまったのである。ミシュテコ族の使用していた旧警察施設はミシュテコ族の所有物ではなく，既に警察当局は新しい施設を使っていたためである。さらにメキシコ市は政府当局に廃屋となった旧警察施設の取り壊しについて相談をもちかけていた。しかし，旧警察施設取り壊しの連絡をミシュテコ族は知らされていなかったのである。

これに対してミシュテコ族は，2009年にメキシコ市長へ抗議を行った。ミシュテコ族の抗議をうけ，市長は新しい運動施設を作る計画を建てた。そして市長は上院議員に先住民伝統スポーツ施設建設に関する建議案を議会に提出するよう要求した。その際，市長はミシュテコ・ボールのみならず，総合的な先住民伝統スポーツの施設を建てるという計画を提示した。

かくして先住民伝統スポーツ施設は空港近くの

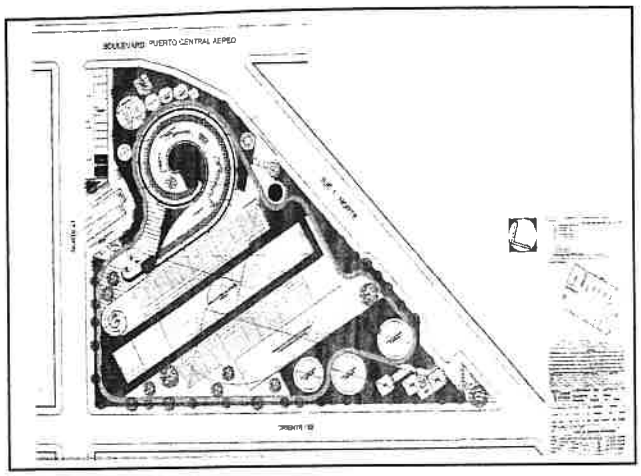


図１　先住民伝統スポーツ施設の製図
（アナ・クラウディア氏提供）

敷地に建設することが決まり，2010年1月に着工を開始した。完成予定は3年後の2013年である。建設費用はメキシコ市が負担することとなった。先住民伝統スポーツ施設の大きさは計画では1万㎡あり，観客席の設置，ミシュテコ・ボールの博物館を作ることも予定されている。また，火・水・風・土といった古代宇宙論の基本要素をモチーフとした施設になる予定といわれる。この先住民伝統スポーツ施設建設計画については2010年3月に新聞で報道され，公に知られるところとなった(図1)。

以上がメキシコ市における最近の先住民伝統スポーツの動向である。こうした先住民伝統スポーツ施設建設の行方については予断を許さないが，以下，今後の課題を述べたい。

まず，先住民伝統スポーツ施設の完成は3年後とのことであるが，現市長の任期はあと2年しかない。そのため，当事業を次の市長が引き継ぐのかどうかはメキシコにおける先住民伝統スポーツの意義が問われる事態となる。また，メキシコ市長の選出方法は1997年以降，政府による任命から市長選挙へと移り変わり，市民の要望が市政に反映される体制が整備されてきた。このたび先住民伝統スポーツ施設建設が決定したのもメキシコ市民と政府の間で市長が柔軟に行動した結果であった。ただし，当施設にて扱われるスポーツは「先住民伝統スポーツ」ではなく「国民伝統スポーツ」として取り扱われることになるのだという。ここに政府が当施設によって諸民族のエスニシティをナショナリティへと回収，統合しようとする試みが窺えるのである。市長は市民の声に耳を傾けつつ，政府の「インディヘニスモ」の方針を十分に汲んだ施策を展開しているのである。今後，メキシコ市における政府と各民族の折衝を把握する上で市政の役割は注視されなければならないだろう。

（中嶋）

5. 学校体育における先住民伝統スポーツ

メキシコの学校体育の現状と先住民伝統スポーツの体育教材化及びその実施状況について，メキシコ・シティの大学や小学校を対象に調査を行った。

現在メキシコ全土で280万人の児童が小学校に通っているが，子供たちの健康に対する懸念は年々深刻化しているようである。文部省の体育・スポーツ医学担当者は，「メキシコの児童の肥満率は世界トップクラスであり，体育の必要性が健康面から認知され始めている[viii]」と述べていた。

文部省はそのため公教育の授業時間数を増やすよう努めてきた。児童の肥満化や体力低下による健康問題に対して，学校教育が中心となって，児童に適正な運動習慣を身につけさせるためである。そもそもメキシコで義務教育が開始された当初，体育は学校のカリキュラムに含まれていなかった。その後，何度かのカリキュラム改正を経て，週1回1時間の授業が行われるようになり，2010年8月からは週2回となった。

結果としてメキシコでは多くの小学校が8:00－12:30という授業時間を採用していたが，近年では授業時間を増加し，8:00－14:00や8:00－17:00までとする小学校が多くなった。8:00－

17:00の授業時間を採用している学校の多くは進んで部活動を取り入れるようになっている。

このようなメキシコの学校教育における体育の位置づけの変化は児童の健康問題のみならず，ナショナル・アイデンティティ形成の面からも促されてきた。90年代以降，先住民伝統スポーツの学校体育への導入及び教材化が積極的に進められてきたのである。政策の拠点は「AVANDEP」と呼ばれる先住民伝統スポーツプログラムである。

1992年，メキシコ文部省の体育局（La Dirección General de Educación Fisica）が推進する「AVANDEP (Avance deportivo Escolar)」という体育教育プログラムによって，学校体育に先住民伝統スポーツが導入された。AVANDEPの狙いは大きく次の二つにあると考えられる。一つはメキシコの先住民伝統スポーツを学び，実践することを通して，メキシコに固有の伝統習慣を獲得し，文化を形成することである。これは，多民族国家であるメキシコが，学校体育と部活動で行われる先住民伝統スポーツ学習によって，早い時期にメキシコ人としての意識を児童の中に形成させようとするアイデンティティ教育の一環と見なす事ができるだろう。体育局は，AVANDEPの目的を「古代から伝わる伝統スポーツ・遊戯を守り続けること。そして，古代から伝わる伝統スポーツ・遊戯の方法を現代に伝えていくこと[ix]」としている。

もう一つは現代の学校体育に適した形で先住民伝統スポーツの教材化を行い，それによって学校体育の中で早い時期からスポーツ習慣を形成し，生涯スポーツの普及を図り，近年問題視されている肥満などの健康問題の改善に寄与することである。先住民伝統スポーツの教育と実践は，既存の体育プログラムの目標にも対応しているとされている。プログラムの推進者は，「伝統スポーツを通して，健康状態を整える能力を養うとともに，運動能力を伸ばし，運動に関する関心を高めてポジティブな態度を促進することが可能である」と主張している[x]。

メキシコでは2000年から先住民伝統スポーツの部活動が開始されている。以前からあった近代スポーツの部活動に加えて行われるようになった。当初は5つの小学校のみで始まったが，現在では15校にまで広がり，約1500人の生徒が参加しているといわれる。2007年からはAVANDEPの中で先住民伝統スポーツの研修が行われるようになった。また，先住民伝統スポーツのルールの研究会も行われ，今後さらに発展していくことが予想される。また，同年にはメキシコ市だけでなくメキシコ全土の小学校・中学校において先住民伝統スポーツが学校体育における必修領域となった。学校体育及び部活動で実施されている先住民伝統スポーツは35種目があり，その中の7種目が必須種目とされている。導入された先住民伝統スポーツの選定方法として，文部省当局は「スポーツと呼べるもの，厳しいルールがなくて遊べるものを選定した[xi]」という。例えば，我々が訪問した先住民伝統スポーツ教育に関する研修会の模擬授業ではペロタ・プレペチャのゲームが行われていた。ここでのペロタ・プレペチャは，伝統的な遊び方に則るというよりは，フィールド・ホッケーに似たルールを適用しながら，道具としては伝統的なスティックを用いるというように改良されていた。現在では，人気のある9種目の試合が土曜日に学校や施設で行われている。試合は各スポーツ，年齢，男女ごとに区分され，行われていた。

メキシコのみならず日本や台湾といったアジアの事例でも，伝統的なスポーツを学校体育に取り入れていく上で，いかにそれを教材化していくかということが検討されてきている。その際，教材づくりに用いられている基本的視点は体育科教育学であることが窺える（図2）。図2の内容的視点から見ると，先住民伝統スポーツという教材を通して，「メキシコの伝統文化を学ばせる」という明確な習得されるべき学習内容が見てとれる。

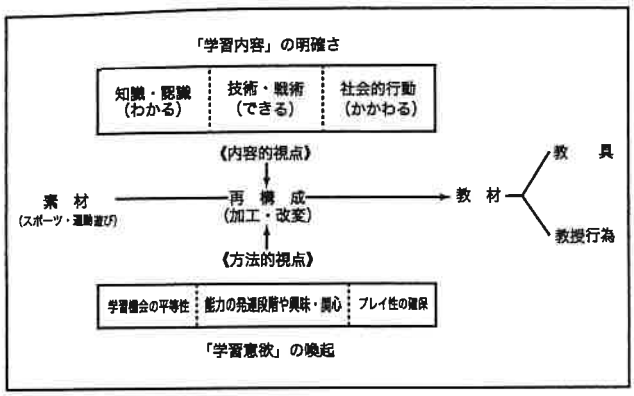


図２　体育の教材づくりの過程とその内容的・方法的視点　（岩田 1994, p.31 より転載）

このことは先述した文科省でのインタヴュー調査からも明らかである。同様に図２の方法的視点で見ると，先住民伝統スポーツという子供たちにとって目新しいものを教材として用いることによって，学習意欲の喚起を図っていると考える。具体的な先住民伝統スポーツの「再構成」の過程においては，例えば，プレイにあたって児童用に作られた専用の用具が用いられる。また，男女共に行えるルールを案出し，さらには学年ごとにルールを変えてゲームの簡易化を図るなど，学習の「スモール・ステップ化」や安全面・教育面への配慮などが窺える。

こうした教材化のプロセス，あるいは部活動組織の拡充を通して，古くからある遊戯は「再構成」を余儀なくされる。しかし，まさにこうした「再構成」を通じて国民伝統としての「先住民伝統スポーツ」が生成されていくのである。

（園家，庄形）

6. 先住民伝統スポーツ大会

6-1. 大会概要

2010 年 10 月 22 日から 24 日にかけてタバスコ州・ビジャルモサにおいて第２回南東部先住民伝統スポーツ大会（MEMORIA DEL 2o. ENCUENTRO DEL SURESTE DE JUEGOS Y DEPORTES AUTOCTONOS Y TRADICIONALES）が行われた。主催はメキシコ先住民伝統スポーツ連盟（FEDERACION MEXICANA DE JUEGOS Y DEPORTES AUTOCTONOS Y TRADICIONALES, A.C.）であり，メキシコ南東部に位置するタバスコ州，ユカタン州，カンペチュ州の３つの州が参加した。

6-2. 大会の流れ

大会のメインとなるのは 23 日である。かつての村役場であり現在は広場として使われている場所で，朝９時より開会式が行われ，その後競技へと入った。

【開会式】

子供たちの太鼓の演奏と共に開会式が始まった。開会のあいさつの後には子供たちによる短い劇が披露された。

【競技】

21 種目のスポーツが１種目ずつ順番に行われていく。競技時間は１種目につき約 10 ～ 15 分程度である。主な競技者は４つの州から集まった小学生から中学生ぐらいの子供たちで，大人はあくまでサポート役である。また，どの種目も本気で競い合い優勝者を決めるということはない。そのため競技者たちは皆，決められた短い時間内でそのスポーツを楽しみ，そして披露しているという印象であった。

6-3. 先住民伝統スポーツの種類

以下が行われた先住民伝統スポーツの種類およびその競技内容である。記載順番は当日行われた競技の順番である。

(1) アバニコ（ABANICO），カンペチュ州

植物の葉で編んだラケット（アバニコ）を使ってボールに触れずに風圧で転がしあう競技である。ゴールはメンバーの一人が支えて持っている籠であり，この中にボールを入れることで得点と

なる。主にナカフカ（Nakajuka town）という町で行われているという。

写真１　アバニコを行う子供たち

(2) ブリンカ・ソゴ（BRINCA　SOGO），カンペチュ州

縄跳びのことである。短い縄を使って一人で跳ぶもの，長い縄を使って複数人で跳ぶもの，長い縄を跳びながら短い縄でも跳ぶもの，などの種類が見られた。

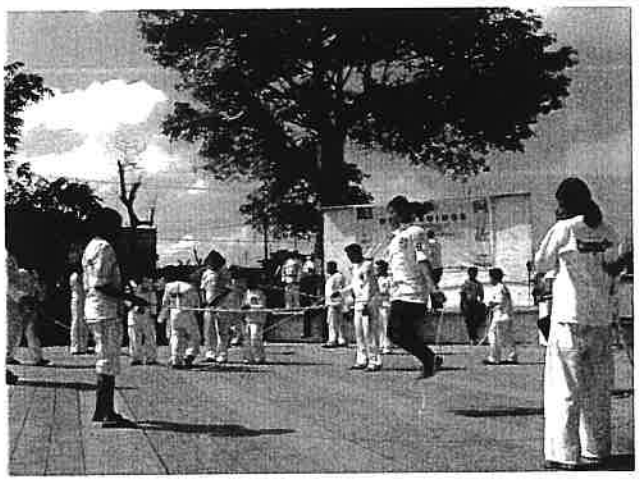


写真２　ブリンカ・ソゴを行う子供たち

(3) カレラ・カレティラス（CARRERA CARRETILLAS），ユカタン州

二人一組になり，一人がもう一人の両足を持ち，足を持たれた方は両手を地面につけて歩き，その速さを競う競技である。日本でも「手押し車」と呼ばれ運動会などでしばしば見受けられるものと同じである。

写真３　カレラ・カレティラスを行う子供たち

(4) ティン・オロチェ（TIN HOROCH），カンペチュ州

500円玉ほどの大きさのコイン状のものにひもを通し，そのひもを引っ張ることでコイン状のものを回す競技である。ひもを引っ張るのは手の他に，足や口なども使い，一度に複数回すなどし，その妙技を競う。

写真４　ティン・オロチェを行う子供１

写真５　ティン・オロチェを行う子供２

(5) カレラ・デ・サコス (CARRERA DE SACOS), ユカタン州

下半身の腰から下が袋の中に入った状態でジャンプしながら進み，その速さを競う競技である。

写真 6 カレラ・デ・サコスを行う子供たち

(6) トロンポ (TROMPO), カンペチュ州

独楽まわしのことである。ひもを使い独楽を回し，その独楽を手に乗せてその妙技を競う。

写真 7 トロンポを行う子供たち

(7) カレラ・コン・ラタス (CARRERA CON LATAS), ユカタン州

ひもの付いた缶の上に乗り，ひもを手で持ちながら歩き，その速さを競う競技である。

写真 8 カレラ・コン・ラタスを行う子供たち

(8) ティンボンバ (TIMBOMBA), カンペチュ州

40～60センチの木製の棒 (a) と，同じく木製で5～10センチの，両端を尖った形に削られた独楽のようなもの (b) を使用する。bを地面に置き，aでbの端の部分をたたき，bを空中に浮かせる。そして空中に浮いた状態のbをaで打つ，という競技である。

写真 9 ティンボンバで使用する道具

(9) ロン・シンタ (LON CINTA), ユカタン州

10センチほどのリボンの先にプラスチックの輪がついたものを，さらに競技者の身長より少し高い位置に張ったロープにくくりつけた状態で競技が始まる。競技者は細い棒を持ち，それをリボンの先に付いた輪に通し，そのリボンをロープから引き取る。いち早くリボンを取れた者が勝者である。

写真 10 ロン・シンタを行う子供たち

(10) チャチャラ (CHACHARA)，カンペチュ州

6人ほどで円を作って座り，石を使って行う競技。

写真 11　チャチャラを行う子供たち

(11) ペロタ・プレペチャ (PELOTA P' UREPECHA)

木製の先の曲がったスティックでボールを転がし，取り合う競技。藁で編まれた脛当てを装着しているのも特徴的である。

写真 12　ペロタ・プレペチャを行う子供たち

(12) サンコス (ZANCOS)，カンペチュ州

いわゆる竹馬のような競技である。しかし素材は木製で，棒が体の横にくる形で足をかけるスタイルである xii。

写真 13　サンコスを行う子供

(13) バレスタ・マヤ (BALLESTA MAYA)，ユカタン州

日本で行われているのと似た射的である。

写真 14　バレスタ・マヤを行う子供

(14) アロス (AROS)，カンペチュ州

金属製の輪を，同じく金属製の棒で支えながら転がす競技である。

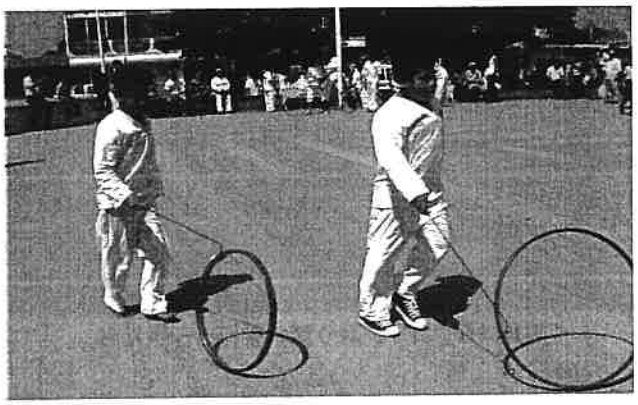


写真 15　アロスを行う子供たち

(15) バレロ (BALERO)，ユカタン州

日本のけん玉と似た競技である。しかしけん玉と違い球は丸ではなく俵型であり，玉を受ける三つの皿はなく，けん先しかない。

写真 16　バレロを持った子供

(16) ティラウレ (TIRAHULE), カンペチュ州

いわゆるパチンコのようなもので，対象物めがけて玉を飛ばし，当てる競技である。

写真 17　ティラウレを行う子供たち

(17) コイン取り競争

丸い金属板にコインをくっつけ，それをロープにつるした状態で競技が始まる。競技者はそのコインを口で取る。

写真 18　コイン取り競争を行う子供たち

(18) ロープ投げ

競技者がロープを持ち，それを対象物となる木の枝に投げ，ロープをひっかけて木を取る競技である。

写真 19　ロープ投げを行う子供たち

(19) チャカラ (CHAKARA), カンペチュ州

いわゆるケンケンパのようなもので，地面に書かれた枠に従って片足ないしは両足でジャンプをして進む競技である。

写真 20　チャカラを行う子供たち

(20) フエゴ・デ・コロソ (JUEGO DEL COROZO), タバスコ州

乾燥させたヤシの葉をラケットに見立て，そのラケットでボールを取り合う競技。メンバーの一人が籠のゴールを持っており，その中へボールを入れると得点となる。1チーム5人で行われる。

写真 21　フエゴ・デ・コロソを行う子供たち

(21) ペロタ・プレペチャ (PEROTA P' URHEPECHA), タバスコ州

木製のスティックでボールを転がし取り合う競技である。競技者がすべて子供である本大会において，唯一ペロタ・プレペチャのみ大人（体育教員）によって行われた。

写真 22　ペロタ・プレペチャを行う先生たち

6-4. 学校体育とのかかわり

先述の通り本大会の競技者はほぼすべて子供であった。というのも，5章で述べたように現在メキシコでは学校体育のカリキュラムの中に先住民伝統スポーツが取り込まれており，また部活動でも積極的に先住民伝統スポーツが行われているからである。

そして子供たちのサポートを行っていたのが各州の体育教員たちである。彼らはみな大会前日に行われたAVANDEP関連の研修会（XX ANIVERSARIO DEL PROYECTO DE EDUCACION FISICA EN EL MEDIO INDIGENA）にも参加している。この研修会では体育教員たちによる先住民伝統スポーツのデモンストレーションが行われた。また体育大学にてメキシコ先住民伝統スポーツ連盟の連盟長であるグレゴリオ氏（Gregorio Ramos Melo）によるペロタ・プレペチャについての講義が行われた。体育教員だけではなく体育大学に通う学生たちも積極的に参加していた。

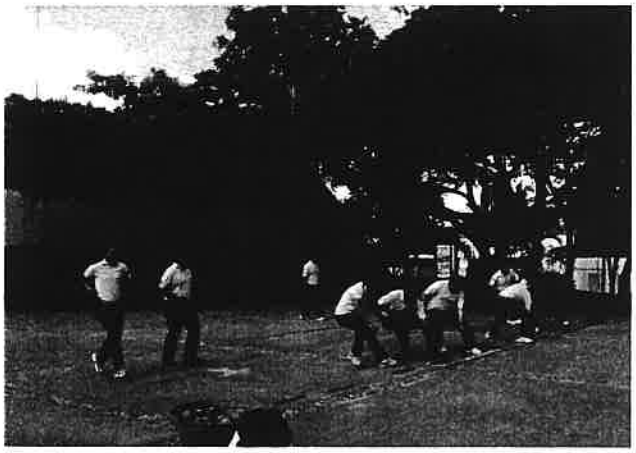


写真 23　体育教師が先住民伝統スポーツをデモンストレーションしている様子

この研修会はあくまで先住民伝統スポーツ大会とは別の催しであるが，先住民伝統スポーツ大会で体育教員たちが集まるのを機にこうした研修の場を設けているのであろう。このことからも，先住民伝統スポーツ大会がメキシコの学校体育と連携したイベントと理解できる。先住民伝統スポーツ大会は現在のメキシコ学校体育，そして先住民伝統スポーツを考える上でも重要である。

（國寶）

【参考文献】
・落合一泰 1996「文化間性差，先住民文明，ディスタンクシオン―近代メキシコにおける文化的自画像の生産と消費―」『民族学研究』61（1）pp.52-80.
・黒田悦子「メキシコ」『民族遊戯大事典』大修館書店 pp.533-538.
・吉田栄人 2007「メキシコにおける多文化主義と民族的アイデンティティ―先住民伝統医療の文化資本化をめぐって―」『神戸市外国語大学外国語研究』68 pp.145-179.
・吉田栄人（編）2005『メキシコを知るための 60 章』明石書店 .

【参考資料】
La educación física en las escuelas y como se insertan los j.t.（AVANDEP）

【註】

i　スポーツ人類学が対象とする「民族スポーツ」あるいは「民族遊戯」を指す言葉としてメキシコではこの用語が使用されている。本稿もそれにならって，「民族スポーツ」あるいは「伝統スポーツ」の意味でこの用語を使用する。

ii　吉田 2007

iii　ナショナル・アイデンティティの確立はメキシコを含むラテンアメリカ諸国に共通の課題である［落合 1996］。

iv　1810 年の独立，1910 年の革命の中心になったのは白人とメスティソ（混血）とされる。

v　例えば，吉田栄人が編集した『メキシコを知るための 60 章』は舞踊を軸としてメキシコ文化を知るという構成になっている（吉田栄人，『メキシコを知るための 60 章』，明石書店，2005 年。）

vi　吉田［2005］は，当舞踊について「メキシコ民族舞踊」と訳し，「民俗（folclorico）」ではなく「民族」を使っている。吉田はこれについて「メキシコ人という，人種や民族，文化の違いを乗り越えようとする国民としてのメキシコ人の民族意識（ナショナリズム）がそこには色濃く反映している」と述べている。ここで吉田は「民族」を国民と同義と解する立場をとっている。メキシコ人のイーミックな表現「民俗」を研究者のエティックな表現「民族」に翻訳しているといえる。

vii　1996 年，教育省にある文化局から先住民伝統スポーツ・遊戯の部局が独立した。文化局の設立は 1938 年のことであり，先住民，移民との合同で様々な伝統文化を振興するために設置された。

viii　2010 年 10 月 25 日に行った文科省でのインタヴュー調査。

ix　2010 年 10 月 25 日に行った文科省でのインタヴュー調査及び，AVANDEP の推進者の一人であるグレゴリオ氏から頂いた資料を参照。

x　La educación física en las escuelas y como se insertan los j.t.（AVANDEP）

xi　2010 年 10 月 25 日に行ったインタヴュー調査。